

目次

大いなる過失

5

訳者あとがき 437

解説 亜駆良人 440

主要登場人物

- パトリシア（パット）・アボット……………モードの私設秘書
モード・ウエインライト……………クレスカス回廊邸の女主人
トニー・ウエインライト……………モードの一人息子
ベッシー・ウエインライト……………トニーの妻
ドワイト・エリオット……………ウエインライト社の顧問弁護士
ドン・モーガン……………リディアのかつての夫
リディア・モーガン……………ドンのかつての妻
オードリー・モーガン……………リディアの娘
マージェリー・ストダード……………ストダードの妻
ジュリアン・ストダード……………マージェリーの夫
ビル・スターリング……………クレスカス医師
エヴァン・エヴァンズ……………クレスカス回廊邸の夜間警備員
ジム・コンウェイ……………警察署長

第1章

モード・ウエインライトと初めて言葉を交わしたのは、回廊邸クロイスターズの夫人の私室だった。夫人は席札の束を手にも、いつもの伸長式テーブル——夫人がデイナーパーティーの席決めに使用するテーブル——に座って困り果てた顔をしていた。

「さあ、入っておかけなさい、ミス・アボット」と夫人が言った。「わたし、立ち上がれないのよ。動くよ、ほら、このお粗末なテーブルが倒れてしまうの。倒れてもう三度も席決めをやり直したんだから」

テーブルが倒れたとしても何の不思議もない。天板が目いっぱい引き出されているし、その天板の縁には百本ほどの溝が刻まれているはず。つまりこうだ。天板の大きさを自在に変えて、名前を書いた席札を溝に真つすぐ差し込む。そうやってデイナーパーティーの席次を鳥瞰的に見る。それから気の合う者たちをしかるべく隣合わせにする。ところが噂によると、夫人はただ単に席札をシャッフルして並べるだけらしい。いつだったか、ジョゼフ・ベリーをセオドア・アール夫人の隣に配したことがあった。アール夫人はもう何年も彼と口をきいていないというのに。

そのとき夫人がちよっと体を動かしたのだろうか。その瞬間を狙ったかのようにまたもやテーブルが中央で分かれて倒れ、溝に差した席札が白いベルベットの敷物の上にはびと飛び散った。同時に夫人

が天を仰いで目を閉じた。

「片づけてちょうだい」夫人が言った。「もう我慢できないわ。階下の者に修理させて、二度と倒れなくなるまで持つてこないで」

ふと見ると部屋の隅に気遣わしげな表情の家政婦長がいて、そばで夫人付きのメイドがおろおろしている。わたしが席札を拾い集めているあいだに二人はテーブルを部屋から運び出した。ウエインライト夫人は座り直して安堵の声を漏らした。

モード・ウエインライトを初めて間近に見た。大柄で、はつとするほど凛とした女性。五十歳くらいだろうか、年齢を気にするでもなく、古風な部屋着を着て、寝室用の室内履きを履いている。大きな頭には生来豊かな金髪。その日はその髪を長い三つ編みにして背中に垂らしていた。三つ編み姿を目にするのは寄宿学校以来だ。わたしが三つ編みを見ているのに気づいて、夫人がにっこり微笑んだ。「この三つ編みは気にしないで。亡くなった主人のジョンがわたしの髪を好きだったの、だからずつと切らずにいるのよ。ヒルダは嫌がってるけど」

ヒルダというのはおそらく先ほどのメイドだろう。

いつのまにかわたしはそんな夫人に好意を抱いていた。とても気さくで親しみを感じさせる人だ。なんて不思議なんだろう。何年も噂を耳にしている頭では嫌っていた。それなのに会った途端、たちまち好きになるとは。わたしはその日、いっぺんでモード・ウエインライトが好きになった——三つ編みも室内履きも、何もかも。

夫人はわたしに煙草を勧め、自分でも一本手にして笑みを浮かべてわたしを見た。

「さてとミス・アボット、この惨状をどう思ってます？」

「わかりません」わたしはおそろおそろ答えた。「惨状なのでしょうか？」

「普通そう思うんじゃない。ねえ、ファーストネームは何とおっしゃるの？ お尋ねしてもいいかしら？ そのほうがもつと打ち解けられるでしょ」

「みんなからはパットと呼ばれています」

「パット」おうむ返しに夫人が言った。「すてきだわ。パトリシアだからそう呼ばれているのね」

「はい」

「いい名前ね。わたしの名はモード。ほら、Come into the garden, Maud （イギリス詩人、アルフレッド・テニソンの詩集「モード」の二節。「園生に入つておいで、モード」） って詩の。やな感じでしょ？」

軽くて明るい口調だが、その実わたしをじっくり観察している。さりげなくではない。夫人は策を弄したりしない。開けっ広げで、子どもが見知らぬ人をじろじろ見るような、そんな目で見ていて夫人にしてみればわたしは見知らぬ人間だ。そのわたしがなんと、この広い館やかたの夫人の私室に座っているのだ。後ろ盾も何もなく世間に放り出され、自力でどうにかするしかない若い女の格好の見本。あの日、ポンコツ車で丘を登って途轍もなく壮大な回廊邸を目の当たりにしたとき、すぐに引き返そうと思った。私道のずっと先に、ワシントンの国会議事堂と新築のビバリー高校を合わせ、裁判所の雰囲気添えたような館がそびえていて、正直言つて恐怖を覚えた。

だがいまはもう怖くない。どちらかといえば面白い。夫人は煙草を消すと背筋を伸ばした。

「あなたのことを教えてちょうだい、パット。それでおあいこでしょ。ずっといてくださるのならね。ぜひそうしてほしいと思つてるのよ、そうすればわたしのことはすぐにわかるでしょうから。スターリング先生のお話だと、あなたは——その、お一人だとか。ご家族はいないの？」

「父も母も二人とも亡くなりました」そう答えた途端、喉がきゅつと締めつけられるように感じた。

「いいのよ。悪かったわ。お二人ともお亡くなりになって、さぞかしご苦労なされたんでしょね」

「ええ大変でした」包み隠さずに話した。「少しばかり不動産があるのですが、ほとんど空き家か、抵当に入っています。他に大した物はありません。わたしがここでお仕事ができるのなら——」

「もちろんできるわ。あとは、あなたがここ、わたしたちを気に入ってくれるかどうかよ。こちらは最善を尽くしてあなたを幸せにするわ」

そう、夫人はそう言ってくれた。わたしを幸せにすると。何もかもが五月の朝のように明るくなる。その日はそれがすんなりと信じられた。窓から吹き込む六月のそよ風、夫人の親しげな笑顔、開け放したフランス窓の外に張り出した夫人専用の屋上庭園、色鮮やかな早咲きの花々、日向で昼寝をしている大きなマスティフ犬。幸せで贅沢。室内にはふかふかの白い敷物、淡いグレーの壁、そして水色やローズ色、黄色が混じった布張りの椅子や寝椅子。外には一部が植栽に隠れているあのおぞましい遊戯場。これらすべてが、わたしたちにとってのちに大きな意味を持つことになる。

話はそれで決まり、ではさっそく仕事をとばかりに夫人はいきなり姿勢を正した。

「それでね、わたしが主催する今度のディナーパーティーだけど、どう思っ、パット？ 間違っているかしら、それとも？」

内心わたしは間違っていると思った。その理由を、いや、この物語を理解してもらうためにも、まずはビバリーでわたしたちが丘の手と呼ぶ地域と、丘の手が村と呼ぶ谷あいあの地域との奇妙な関係について説明しておこう。ビバリーでは自分たちの村を郊外だとは考えていない。ビバリーは一通りのものが揃っている共同体で、自分たちのクラブがあり、昔から続く独自の社交生活がある。住民は十

マイル先の市内で収入を得られたし——実際に得てきた。ただそのためには、朝の八時半から夕方五時半までは市内にいななければならない。だがビバリーは住民の心のふるさとだ。流れる川は住民の川だし、美しい古い家並みも庭園もすべて住民のものだ。溪谷の向こうには二十年前まで丘陵地が広がっていた。

わたしは生まれてからずっとビバリーに住んでいる。川でカヌー漕ぎを覚え、寄宿学校に入るまでは自転車で通学し、ビバリークラブの舞踏室で最初のダンスレッスンを受けた。ミス・マッティが丈の長いゆったりした黒いタフタのスカートをつまみ、形のよいつま先を突き出す。と、二列に並んだ小さな紳士淑女たちがぎこちなくぴよんぴよん跳ねる。「ワン・ツー・スリー、ワン・ツー・スリー」ピアノが響き、舞踏室の床はピカピカ光り、将来の村民たちはくすくす笑いながらダンスを習う。

だがある日、ヒルの何かが変わり始めた。それまでヒルはみんなのものだった——ピクニック、緑に囲まれた小道のハイキング、おとなしい飼馬での乗馬。子どもたちは馬丁——大抵は廩務員——に見守られて馬に乗った。ときには馬術教官のミスター・ジェントリーからジャンプを教わった。低い柵越え、そして大きな馬にさっそうとまたがるジェントリー教官。

「ようしバトリシア。きみの番だ」

みぞおちが凍りつき、小さな手に汗がにじむ。チャーリーやジョーが次々とエベレスト並みの高いジャンプをする。ある日のこと、ジェントリー教官の馬が急に頭をのけぞらせたので鼻——もちろんジェントリー教官の鼻だ——を骨折し、つぶれてひどく出血した。

そのときわたしは七歳で、家に帰るまで大声でわんわん泣き続けた。

ヒルに起きたことはどこにでも見られることだ。ただこれは、わたしたちだけが抱える悔しさであ

り、怒りだ。ある日、ジョン・C・ウエインライトが市内から車でやってきてヒルに登り、ちょうどいい具合に村が隠れて川が一望できる土地を見つけた。それから二年間、ヨーロッパを旅しては、建築家が発狂せんばかりに、石や大理石、モザイクやタイル、その他もろもろが入った木箱を大量に送りつけてきた。そうした品物の中に古い修道院の石の回廊一式があった。天をも恐れぬその行為に建築家は自殺してやるとまで言って抗議したが、ジョン・Cは頑として譲らなかつた。設計が何度も変更されて、館の中央に中庭が設けられ、周囲に屋根付きの歩道、円柱、敷石などが配された。

それが回廊邸クロイスターズという名前の由来だ。

当然、ジョン・Cに続いて他の人たちもやってきた。市内からの脱出が始まっていた。それから十年——わたしが十七歳になるころには、みんなが大好きだった小道はセメントの道路に変わり、谷あいの住民が大きな容器を持って車で飲み水を汲みに出かけた（「ジョージ・ワシントンの泉」には土管が敷設され、水は下水に流された。古いコールマン農園は、十八ホールのゴルフ場を備えたカントリークラブに変わり、やがて猟犬を何匹も抱える狩猟クラブが結成された。

だからといってこの二つのコミュニティ間に確執があるわけではない。ビバリーはそのままビバリーであり続け、ヒルは依然としてヒルだ。カントリークラブなどで双方が顔を合わせても、挨拶もそこそこにさっと別れてしまう。モード・ウエインライトはその双方を一堂に会させようというのだ。「なぜそうしてはいけないの？」夫人はわたしを見つめながら言った。「わたしはここに十八年も住んでいるのよ。なのにビバリーには、ファーストネームで呼び合える女性が一人もいないわ」

思わず笑みがこぼれた。夫人ならきっと誰とでも親しくなれる。

「母が名刺を持ってここをお訪ねするのに十年かかりました。それもただ名刺を置いて帰るだけでし

た」

「でも、どうして？」と夫人が尋ねた。「そんなの馬鹿げてるわ」

「みなさんはずもと市内にお住まいでした。当然、お友だちも市内からお見えになりました」

「じゃビバリーの人は、わたしたちにおいてほしくなかったの？」

「ビバリーにもそれなりの暮らしがありました。ビバリーは村内だけで充分満ち足りた社会でした。いまもそうです。忘れないでいただきたいのは、村の人たちはみなさんを、とりわけ奥様方をめったにお見かけしないということです。社交の場を作るのは女性です。みなさんはお車で市内と行き来されます。男性方がお顔を合わされるのは列車内や市内のクラブです。たまたまそんなふうになったのです。考えればおかしなことです。わたしは生まれてからずっとビバリーに住んでいます。奥様もここに十八年お住まいです。ですがわたしが奥様をお見かけしたのはたったの二回です」

わたしの話を夫人は面白がった。少し笑って形のいい大きな手で席札をシャッフルした。

「わかったわ。女王は執務室においてお札を勘定していたってことね。このおぞましい館ときたら！馬鹿げてない、パット？ それなのにわたしったら、このパーティーでいったい何をしようというのかしら？ スターリング先生は病気だと偽ってキャンセルしろっておっしゃるのよ」

「やりましょうよ」反射的にわたしは言った。「みんな来てくれますし、それにみんな気に入りますよ。若い人たちが招いてディナーのあとでダンスを楽しんでもらってもいいです。よろしければわたしが招待客リストを作って電話をかけます」

わたしの提案を夫人は気に入ってくれた。夫人は若い人たちが大好きだ。すぐさまわたしは市内で最高のバンドを電話予約し、二人ではしやぎながらリストを作った。つい先日、偶然そのリストを見

つけた。オードリー・モーガンの名前が載っている。ラリー・ハミルトンのも。昨秋の朝、オードリーと車に乗っていたときのことをふと思い出した。拳銃のことを話してくれたときだ。オードリーは黒い縁取りのハンカチを出してヒステリックに叫んでいた。「母さんは父さんを憎んでいたのよ。死ねばいいと思ってたんだわ」

オードリーの言葉に、あの日、わたしは危うく殺人を犯しそうになった。

そのとき、きちんと修理されてテーブルが戻ってきた。そこで二人でパーティーの席を決めていった。パーティーは中庭で開く予定だ。中央に睡蓮の池、その周りに長いテーブルを並べる。水面に月の光が揺れる。

「きれいでしょうね。気に入ってもらえるといいけど」どこか切なげに夫人が言った。

少々芝居がかかっていると思ったが、口にはしなかった。二人でせつせと作業を続け、席の配置を決めていった。五時にお茶が運ばれてきて、一休みしてお茶を飲んだ。夫人は自分や息子のトニーのことを少し話してくれた。言うまでもないが夫人は息子を深く愛している。この何年か、この息子ときおり見かけてはいたが実際に顔を合わせたことはない。それから未亡人になったことや、ジョン・C・ウエインライトのことも話してくれた。

「あの人はとてもよくしてくれたわ」夫人はそう言って吐息を漏らした。

ますます夫人が好きになった。夫が亡くなったことを夫人は心から悲しんでいるようだ。が、わたしの記憶にある彼は、のっぼのはげ頭で、白髪まじりの口ひげをたくわえていて、どうみても胸がとく、再び作業を始めたとき、夫人とはもう何年来の知り合いのような気がした。

〔著者〕

M・R・ラインハート

本名メアリー・ロバーツ・ラインハート。アメリカ、ペンシルベニア州ピッツバーグ生まれ。1896年に医師と結婚。1903年に株式市場不況の影響で生活が苦しくなり、家計を助けようと短編小説を書き始める。迫りくる恐怖を読者に予感させるサスペンスの技法には定評があり、〈HIBK（もしも知ってさえいたら）〉派の創始者とも称された。晩年まで創作意欲は衰えず、The Swimming Pool (52) はベストセラーとなり、短編集 The Frightened Wife (53) でアメリカ探偵作家クラブ特別賞を受賞。代表作の『螺旋階段』(08) は『バット』(31) のタイトルで戯曲化されている。

〔訳者〕

服部寿美子（はっとり・すみこ）

大阪外国語大学卒業。関西学院大学大学院、言語コミュニケーション文化研究科卒業。2000年より実務翻訳を開始する。

おお かしつ
大いなる過失

——論創海外ミステリ 223

2018年12月25日 初版第1刷印刷

2018年12月30日 初版第1刷発行

著者 M・R・ラインハート

訳者 服部寿美子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1782-8

落丁・乱丁本はお取り替えいたします